

---

# リトルバスターズ。プラス1名

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リトルバスターズ。プラス1名

### 【Nコード】

N3429Y

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

高校に入学した理樹、鈴、真人、健吾。

リトルバスターズ復活？

ネタバレあり……

## プロローグ(前書き)

感想やこうしたほうがいい、というのがあったらよろしくです。  
あ、ネタバレありw

## プロローグ

高校入学試験の発表日。

僕、直枝理樹は幼なじみである、筋肉バカの井ノ原真人と剣道一直線の宮沢謙吾、そして唯一の女子の棗鈴とともに高校の発表を見に来ていた。

この高校は進学校で、僕ら幼なじみのリーダー的存在、棗恭介が通っている高校である。

「真人だけ落ちてるかもな？」

謙吾がそんなことを言い出した。

縁起悪いから。

「そ、そんなわけないだろ。この筋肉があるんだから」

真人が力瘤を作りながら言った。

「いや、筋肉は関係ないと思うよ」

「真人はバカだからな。」

鈴まで。

「そんなことないよ。真人だって頑張ったんだから大丈夫だって」

「理樹。心配するな」

真人が珍しく真剣な顔をしていた。

もしかして真人には合格したという未来が見えているのかも。

「筋肉さえあれば何でも乗り越えられるものだ」

変な期待をした僕がバカだった。

「ふっ」

謙吾が鼻で笑った。

「あ？　なんだその笑いは。そんなことありえませんか。筋肉なんて運動にしか使えないくだらしないもんだ。とでも言いたいのか？　ああ？」

「いや、誰もそんなこと言ってないじゃん」

出たー。真人のお金を払ってでも見たくなくなるような言いがかり。

「いや、さすがの俺もそこまで言わん。だが、勉強に筋肉は関係ないだろ」

「だいたい真人はノートを前に広げただけで頭痛を起こしていただろ」

鈴が真人にハイキックを食らわした。

「仕方ないだろ、俺は頭を使うと知恵熱が出るんだ」

真人はハイキックを食らいながらも答えた。というか痛くないの？

「真人、知恵熱っていうのは赤ちゃんが出す熱のことだよ？ 頭を使っただけから熱が出るってことはないよ」

「理樹。俺の場合は頭を使ったら熱が出る」

「そんなわけあるか」

「またもや鈴のハイキックがさく裂した。」

「ほら、バカやってないでさっさと来い」

謙吾が人ごみの壁の手前で呼んでいた。

「ごめん謙吾」

「理樹が謝ることないだろう。しかしこのままいくと鈴は大丈夫か？」

「あ、そっか」

鈴がこの人ごみに入るのはちょっと大変かも。押しつぶされてしまいそう。

「理樹。それなら俺と真人でお前と鈴の分を見てきてやろうか？」

「いいの？」

「ああ。お前と鈴に何かあったとあつては恭介に顔向けできん」

「わかった。これ僕の受験番号」

僕は受験番号が書いてある紙を謙吾に渡す。

「ああ」

鈴も受験番号が書かれた紙を渡す。

「よし。真人行くぞ」

「おお」

真人と謙吾が人ごみに入っていく。

2人とも大きいからどこにいるのかよくわかる。  
しばらくして2人とも戻ってくる。

「どうだった？ 謙吾」

「全員受かっていたぞ」

「よかった」

楽しくなりそう。そんな予感がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3429y/>

---

リトルバスターズ。プラス1名

2011年11月16日01時29分発行